

- (2) 精神疾患をもつ親の子どもへの支援 — フィンランドで開発された親と子ども・家族へのアプローチ —

(看護学科) 上野 里絵

- (3) Therapeutic potential of fingolimod and sphingosine kinases inhibitors in myeloma cells
(フィンゴリモドとスフィンゴシンキナーゼ阻害剤の骨髄腫細胞株に対する抗腫瘍効果)

(血液内科) 田中 裕子

■特別講演

- (1) 乳癌治療の個別化を目指して

講演者 石川 孝 主任教授 (乳腺科学)

座長 三木 保 主任教授 (医療の質・安全管理学)

一般演題: P1-1~20、P2-21~P2-42、P3-43~P3-59

P1-1.

抗菌薬による薬剤熱の臨床的特徴

(社会人大学院博士課程2年微生物学、感染制御部)

○藤田 裕晃、小林 勇仁

(社会人大学院博士課程3年微生物学、感染制御部)

月森 彩加

(感染制御部)

佐藤 昭裕、中村 造、水野 泰孝

(微生物学)

大楠 清文、松本 哲哉

【背景】 抗菌薬による薬剤熱の実態を明らかにし、早期診断に役立てることを目的とした。

【対象と方法】 後方視的に診療録を調査した。2012年9月1日~2015年3月3日までに抗菌薬投与による薬剤熱と診断した21例を対象とした。診断基準は① 抗菌薬投与中に発生する37.5°C以上の発熱で2日間以上持続する。② 他の熱源が否定されている。③ 被疑薬の中止で解熱する。を全て満たすものとした。項目は、抗菌薬の種類、性別、年齢、被疑薬投与期間、被疑薬中止から解熱までの期間、CRP上昇の有無とした。

【結果】 種類はバンコマイシンが6例(24%)、アンピシリンスルバクタムが3例(12%)、シプロフロキサシンが2例(8%)、クリンダマイシンが2例(8%)、セフェピムが2例(8%)、セファゾリンが2

例(8%)、アンピシリンが2例(8%)、ST合剤が1例(4%)、セフトリアキソンが1例(4%)、セフォチアムが1例(4%)、ピクシリンが1例(4%)、メトロニダゾールが1例(4%)、アムホテリシンBが1例(4%)だった。男女比は10:11、平均年齢は59歳だった。平均薬剤投与期間は10.2日(1-33日)、解熱までの平均期間は1.8日だった。CRP上昇をきたしたものは11例(52%)(2.1-32.4 mg/dl)だった。【考察】 本研究ではバンコマイシンが被疑薬となった率が最も高かった。被偽薬投与期間は1日から33日と幅があり、リスクとなりうる投与期間を推測することはできなかった。薬剤熱の経過中に測定されたCRPの最高値は32.4 mg/dlであり、薬剤熱によってもCRP上昇をきたす可能性が考えられた。

P1-2.

Candida 細胞壁 β -glucan 刺激好中球による NETs 形成の検討

(東京薬科大学:薬学部 免疫学教室)

○石橋 健一、山中 大輔、安達 禎之
大野 尚仁

(八王子:腎臓内科)

吉田 雅治、尾田 高志、山田 宗治

【目的】 好中球は、真菌感染に対する生体防御反応において、主たる役割を示す細胞の一つである。

Neutrophil Extracellular Traps (NETs) は DNA-ヒストン、エラスターゼ、ミエロペルオキシダーゼなどから構成される網目状構造体であり、好中球の真菌感染防御機構の一つとして知られている。本研究では、主要病原真菌である *Candida albicans* の細胞壁 β -グルカンで刺激した好中球による NETs 形成について検討した。

【方法】 C57bl/6 マウス由来のチオグリコレート誘導腹腔浸出細胞および骨髓細胞から、Histopaque を用い、好中球画分を単離した。これらの細胞を 2% マウス血清存在下で、*Candida albicans* NBRC1385 より精製した粒子状 β -グルカン OX-CA で刺激した。DNA を sytoxgreen で染色し、NETs 形成を蛍光顕微鏡で観察した。

【結果】 OX-CA 刺激後、2 h 後から NETs 形成が認められ、4 h 後では NETs 形成が増加した。さらに、NETosis を示唆する sytoxgreen 陽性細胞数も増加した。また、これらの細胞は ROS 産生が亢進していることを、ルミノール法によって確認した。さらに、OX-CA と同一一次構造を有する *Candida* 可溶性 β -グルカン (CSBG) で前処理したところ、OX-CA 刺激による NETs 形成および NETosis 細胞が減少した。また CSBG 前処理は、OX-CA 刺激好中球 ROS 産生を阻害した。

【考察】 これらの結果より、好中球は *Candida* 細胞壁 β -glucan に応答し、活性酸素種の産生を誘導するとともに、NETs を形成することによって病原真菌を捕捉し、含まれる抗真菌成分を効果的に菌体に接触させることによって抗真菌活性を発揮している可能性のあることが強く示唆された。

(会員外共同演者：浪岡真之 (東京薬大・免疫学)、山田道之 (横浜市立大))

P1-3.

Acinetobacter baumannii complex による菌血症の疫学・臨床調査

(社会人大学院博士課程 4 年微生物学、防衛医科大学 校内科学講座 (感染症・呼吸器))

○藤倉 雄二

(微生物学分野)

大楠 清文、松本 哲哉

【背景】 *Acinetobacter baumannii* とその類縁菌種で

ある *A. pittii*、*A. nosocomialis* はあわせて *A. baumannii* complex として扱われる。海外では主に菌血症についてその疫学的分布や臨床的特徴の報告がなされているものの、国内での報告はほとんどみられない。

【方法】 2009 年から 2013 年の間に防衛医科大学校病院で血液培養から検出された *A. baumannii* complex 51 株を対象とし、*rpoB* 配列をもとに種の同定を行い、あわせてカルテから臨床データを収集し解析を行った。

【結果】 51 株の *A. baumannii* complex のうち、*A. baumannii* は 25 株 (49.0%)、*A. pittii* は 17 株 (33.3%)、*A. nosocomialis* は 5 株 (9.8%) であった。*A. baumannii* complex の 30 日死亡率は 8.5%、入院中死亡率は 25.5% であり、種ごとの差は認められなかった。患者背景や臨床的特徴も各群に差はみられなかったが、薬剤感受性試験において *A. baumannii* はアミカシンやレボフロキサシンに対する感受性が低下している傾向がみられた。

【結論】 海外報告と異なり種ごとの予後の違いは認められなかったものの、*A. baumannii* は他の 2 種に比べ、薬剤感受性が低下している傾向が認められた。適切な抗菌薬治療を行ううえで、*A. baumannii* complex の種を同定することは有用である可能性が示唆された。

P1-4.

血液培養陽性の結果が判明する前に死亡した感染症症例の臨床的検討

(社会人大学院博士課程 2 年微生物学、感染制御部)

○小林 勇仁、藤田 裕晃

(社会人大学院博士課程 3 年微生物学、感染制御部)

月森 彩加

(感染制御部)

佐藤 昭裕、中村 造、水野 泰孝

(渡航者医療センター)

福島 慎二

(微生物学)

大楠 清文、松本 哲哉

【目的】 血液培養陽性の結果が判明する前に死亡した症例を抽出し解析を行うことで、その臨床的特徴を把握し今後の診療に生かすことを目的とする。

【方法】 2013 年 3 月 1 日から 2014 年 6 月 30 日の